

## 2. リレーエッセイ (2024年7月号)

今月号よりリレーエッセイの執筆者が変わります。7月号から9月号までの3か月を、認定 NPO 法人森のECHICA 代表理事であり、認定こども園 花の森こども園 園長の葭田 昭子（よしだ あきこ）さんにご担当いただきます。葭田さんについては、この短いスペースではご紹介しきれませんが、その実践が自然保育や幼児教育において、今もっとも注目されている保育者のお1人です。ご興味のある方は、下記ホームページや著書をご覧ください。

非認知能力という青い鳥 1

認定 NPO 法人森の ECHICA 代表理事 葭田 昭子



「これからの社会が求める人物」この手のキャッチフレーズに私はずっと違和感をもっている。社会の求めは猫の目のように変わり、その求めに、一人ひとり異なる経験を持ち、重なる襞のような価値をもつ人間が、一律に社会の求めに合わせることを不自然に感じる。

「これからの社会が求めるのは非認知能力」…でた。

非認知能力とは知能や学力ではかれない人の心や社会性に関する能力で、そもそもアメリカの経済学者 J・ヘックマンが 1960年代に行われたペリー就学前実験に根拠があるらしい。

ざっくりいうと、出自や両親の経済状況といった、こども自身ではどうにもならない環境でもその幼児に対して 1日 2時間以上教室で授業を受け、ペアレントトレーニングをしたら、基礎学習を達成し、生活者として収入面で成功し、防犯にも手を染めることがない人格に貢献できたというものだ。



本当にそうだろうか？ 学習スキル以上に向き合う教師の愛があったからではないのかな。恵まれた家庭に何んも自由なく育ち、地位や名誉を手にした（手にしたから？）成功者の中にも、恥知らずな所業で信頼を失墜する者は後を絶たない。これは平たく言えば「欲張り、保身、仲間はずれ、知らん顔、うそつき、わがまま、やっかみ、・・・」といった幼児期におおらかに繰り広げられる人格形成に育ち残しがあるのではないだろうか。

とすると非認知能力は、幼児が単にスキルを教わり、人間界だけで身につくような一朝一夕の代物ではないことがわかる。非認知能力は、社会が子どもたちに求めるものではなく、それが育つ環境を用意できているかというおとなへの問いと捉えたい。

私は、非認知能力とは鈴木大拙や西田幾多郎の言う「思い通りにならない経験」「純粹経験」を通して、蒸散が静かに空に昇るように、あるいは圧倒される畏敬から自ずと湧くのが始まりのように思う。

ではいったいどこに行けば、「思い通りにならない経験」「純粹経験」が得られるのだろうか。 つづく

### ※執筆者紹介

認定 NPO 法人森の ECHICA 代表理事 葭田昭子（よしだ あきこ）

保育士として 4 年間埼玉県に奉職したあと、ゼロから創る人になりたくて陶芸の弟子となる。陶芸家として16年。3男の母。2008年息子の幼稚園が早期教育に転換することを機に仲間と自主保育のようちえん「花の森こども園」を立ち上げる。2021年地方裁量型認定こども園なり、同園園長。著書に「ようちえんはじめました！」（新評論）



<http://www.hananomori.org>